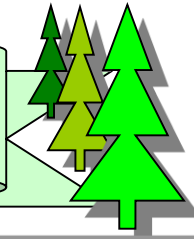


街路樹



「ノートとタブレット端末をどう使い分けるか
～社会科を例に～」



月

「発達障がいへの理解」

「1人1台端末」が配備され、ICTの活用が進む一方で、「ノートの活用に悩む」という声を耳にする機会が増えました。具体的には「タブレットとノートのどちらに書かせるか迷う」「ノートに学習内容が残らない」「書く力が身につかないのではないかと心配である」といった意見です。

タブレット端末の導入により、教師も子どもも、ともにできること(選択肢)が格段に増えたがゆえに新たな悩みや課題も生まれました。もちろんノートとタブレット端末では、それぞれにメリット・デメリットがあり、一概にどちらがよいと断定することはできませんが、それぞれの強み(メリット)を知っておくことでその活用場面が見えてきます。

◎ ノートを活用する場面例(知識・技能)

ノートの強みの1つに、いつでもどこでも使用できる手軽さがあげられます。また、手元に記録が残るため、振り返りや追記が容易です。さらに、「手書きの方が記憶の定着がよく、ストレス度も低い※」という実験結果もあるようです。

このようなことを踏まえ、本時の課題やまとめ、社会的な出来事や重要語句等、本時の核となる要素をノートに残すことにより、学習内容の定着を図ります。単元の終末段階では、ノート見開きで学習内容を整理し、時代の流れやその特色を俯瞰的に捉えることができるようにまとめます。

◎ タブレット端末を活用する場面例(思考・判断・表現)

ある出来事について調べ、考えをまとめる活動をするときには、タブレット端末を活用すると、表やグラフ、イラストを挿入してわかりやすくまとめることが可能です。また、それらの作業をクラウド上で行うことで「他者参照」をしたり、自分だけでは得られなかった情報や考えに触れたりすることができます。タブレットは、調べ活動やそのまとめ、さらには相互評価にも適したツールといえます。

上記はあくまで一例であり、「子どもの学びやすさ」(学習スタイルや好み)についても考慮する必要があります。しかし、大切なのは本時・単元全体の学習を通して育てたい資質・能力を明確にし、その育成に適した学習方法を子どもの実態に応じて準備・提案・提供することです。そして、段階的に子ども自らがそれを選択・判断していく機会を増やし、情報活用能力を伸ばしていくことです。

※ココヨ株式会社・立命館大学 岡本尚子准教授「紙のノートとデジタル端末であるタブレットの筆記における記憶効果の比較実験」(<https://www.kokuyo.co.jp/newsroom/news/category/20240731st.html>)より

7月29日(月)に市文化センター大ホールにおいて「発達障がい教育講座」が開催され、発達支援室ひだまりの室長である齋藤忍氏を講師にお迎えし、今年度最多となる240名の先生方の参加のもと研修を行いました。講義では、「多様な学びの支援～分かる・できる・楽しい授業づくり～」というテーマのもと、参加された先生方は、実際に関わっている学校や学級の子どもの姿を思い浮かべながら熱心に受講していました。

講座の中で特に印象的だったのは、以下の内容でした。

【教育現場で大切にすること】

診断名を明らかにすることに注力するよりも

- ① どのような援助を必要としているかを重要視する
- ② 具体的な指導の手だてを考え実践する
- ③ 学校でできることを具体化する



具体化したことを実践し、子どもの成長を見取って保護者に伝えていくことが、保護者の障がい受容への近道である。

【視点を変えること】

- ① 教室の中に様々な多様性が存在することを前提として、学習方法・教材教具についてあらかじめ様々なオプションを準備する先取りの支援が「ユニバーサルデザイン」の考え方
- ② 問題行動は、子どもたちからの「困っている」「助けてください」のメッセージ
- ③ そのメッセージにいち早く気づき、支援方法を考え、子どもたちに提案し選択させ一緒に取り組んでいく中で、自分に合った学習スタイルの獲得、自己理解・自己支援力の獲得につなげていく

これらのスキルを先生方が身に付け実践していくことが、これからの教育現場では必須であると改めて感じました。そして、その先生方の努力や取組みは、必ず子どもたちの成長や笑顔につながっていくものと思います。



「学校司書との連携を深めるために」



9月24日(火)に「図書館教育担当教員研修」を実施しました。前半は昨年度、東北地区図書館研究大会で日々の実践を発表された小名浜東小学校と錦小学校から「学校図書館の機能の充実と活用について」というテーマで、実践を発表していただきました。両校の実践は学校運営ビジョンや児童の実態に基づき、おすすめの本100選の選定や読書環境の整備、青空図書などの読書イベントの企画、教員・ボランティア・図書委員による読み聞かせなど、創意工夫あふれる取組みが計画的に進められていました。それらの取組みには、教員と学校司書の連携が欠かせません。研修者は学校図書館の効果的な活用、そのための教員と学校司書の連携について、具体的に知ることができました。

また、後半は「子どもたちが学校図書館を好きになるイベント・行事を考える」というテーマで、教員と学校司書の協働ワークショップを行いました。この活動の中で図書館教育担当教員、学校司書それぞれができることとできないことがあること、それぞれの役割、対話の重要性など、気づきの多い研修となりました。「一人の努力はたし算、誰かとの協力はかけ算」です。各校において月に1回でもよいので、学校司書との対話を糸口に、連携を図ってほしいと思います。

